



六中だより

～自主・勤勉・共生～

5月号 No. 2
令和6年5月発行
港区立六本木中学校
校長 松島 智子

よいスタートがきれいていますか

校長 松島 智子

令和6年度が始まり、ひと月が経ちました。新しい学年、クラスがスタートし、授業も本格的に始まり、活気のある生徒の声、校内に響き渡っています。中学校の一日は、整然とした中で行われる朝読書から始まり、午前中は4時間みっちり授業を行います。その後は、お楽しみの給食があり、食べ盛りの中学生ですから、日によっては食缶が空になるときもあります。そして食べた後はこれまたみんなの楽しみの一つである昼休み。生徒は、校庭や体育館は所狭しと言わんばかりに遊んでいたりと、教室でまったりしたり、六本木ホールではピアノを弾いたりと思いの過ごし方をしています。そして午後の授業へ。おなかもいっぱいになり、運動した後は眠気との闘い？いえいえ、大半の生徒はしっかり授業を受けています。帰りの学活の後は「六中タイム」でその日勉強したことを振り返るとともに、さらに家庭で行う自主学習（予習 or 復習）につなげていきます。この「六中タイム」は始めて4年目になりますが、徐々に定着し内容も充実したものになってきました。この実践によって生徒は、自分自身の弱みや足りないところを明らかにし、そこを補うことによって学習の理解度を深めていくことができます。また、六中タイムでポイントとなるところを整理し積み重ねたものを「試験前の勉強に役立てています」という生徒もいます。部活動との両立で大変と思われるかもしれませんが、毎日少しでも取り組むことで学習に向かう習慣を身に付けていけば、このあとの受験勉強をする際にきっと役立つことになるでしょう。

さて、先日、私の大好きな詩人の訃報が飛び込んできました。その方は「星野 富弘さん」です。皆さんも星野さんの作品を一度は目にしたことがあるでしょう。優しいお花の絵に独特の文字で詩が書かれている作品です。これらの作品の全ては、星野さんが口にくわえた筆やペンで書かれたものだと知ったら、驚きませんか。

星野 富弘さんは、1946年に群馬県で生まれ、小学生の時に体操の模範演技を見てから体操に興味をもち、野山や田んぼで遊びながら練習していたそうです。高校生になり器械体操部に入り、大学でも続けて、大学卒業後は高崎市立中学校の体育の先生になりました。体育の教員になって2カ月が経った6月のある日、クラブ活動中にいつもと同じように生徒と一緒に宙返りの練習をしていた時、マット

に頭から落ちてしまいました。自分ではいつものことと思っていましたが、立ち上がろうとしても全く体が動かないことに気付きました。この一瞬の出来事によって星野さんは、「頸髄損傷」といって首の神経を痛めてしまい・首から下が動かなくなってしまったのです。入院中は、年老いたお母さんがつきっきりで看病をすることになりました。何度も生死の境をさまよったそうです。しかし、病院の先生や看護師さんの献身的な治療と、家族の看病のおかげで何とか命の危険は回避できましたが、体は動か



ないままでした。

入院から2年経ったある日、同じ病室の中学生の男の子が東京の病院に移るといので帽子に寄せ書きを頼まれたことをきっかけにペンを口でくわえ、この時はお母さんが帽子を動かして文字を書きました。それからは自分自身で字を書きたいという気持ちから練習が始まりました。最初は一文字書くのもやっとでしかもぎこちない文字でしたが、毎日の努力のおかげで日に日に上達していきました。また、病室にはお見舞いにいただいた花がいつもあり、寝たきりの生活の中で唯一目にすることができた、生きている花のあるがままの姿、美しい姿を書き留めておきたいという思いで絵に描いて残したいと、水性ペンや水彩絵の具を用いて花を描くことにも挑戦していきました。星野さんは元々、自然の豊かな場所で育ちましたから、花や植物によって彩られる景色を見ながら季節の移ろいを肌で感じていたのです。けがをして体が思うように動かなくなり、自分が生きている意味を見失いつつあった星野さんにとって詩や絵を描くことは、生きている実感がもてる唯一の証となり、彼の地道な努力によって描かれた言葉や絵は、見る人々に感動や勇気を与えていきました。また、一時は人を信じることに臆病になっていた星野さん自身も、詩画を通して自分の気持ちを表現することで変わっていきました。彼自身の頑張りはもちろんですが、周りの人たちの支え無くしては到底できなかったことでしょう。



(れんぎょう 1976) (ぺんぺんぐさ 1979)

自分の身に起きた全てを受け入れて、なお自分が生きていくことの意味、周りの人への感謝の気持ち、生きていくことの辛さ、すばらしさを感じることができた星野さんだからこそ、彼の作品は直接、人々の心に響き、温かい気持ちにさせてくれるのだと思います。皆さんも星野さんの作品を手にとって見てください。「自分ができるとして少しでも生きる希望をもち、前に進んでくれたら」と亡くなった今も語りかけてくれているように思えるのではないのでしょうか。

離任式にて

5月2日に、昨年度で六本木中学校を去られた先生方をお招きして離任式を行いました。3月末に校長からの発表はあったものの、先生方からは何も言葉をいただけませんでしたので、4月が始まった当初は、皆、さみしい思いをしていたことでしょう。この日は去られた先生方一人ずつにお礼の手紙と感謝の気持ちを込めた花束を贈呈しました。先生方はそれぞれ、新天地での生活についても触れながら、六中のことを懐かしみ、生徒のみんなに「頑張れ。応援しています。」とエールを送っていただきました。最後にみんなで歌った校歌、2, 3年生による「夜汽車」(K先生の指揮で)は、きっと忘れられない思い出として心に残ることでしょう。先生たちとの思い出を大切に、これからの新しい六本木中学校の歴史を、ここにいる生徒、先生方と共に創り上げていきましょう。

